



日・口日本海浮魚類生態共同調査から

— 日本海のサンマ —

漁業課 丸山克彦

日・口共同調査

本研究所は平成4年よりロシアのウラジオストクにある太平洋漁業海洋研究所（チンロセンター）と共同で日本海スルメイカ生態共同調査を実施し

ていますが、平成6年からは日本海浮魚類生態調査も年に1回行っています。当初は資源の減少が著しいマイワシの生態を明らかとすることを主な目的として始まった調査ですが、現在では浮魚類一般を調査対象としています。

調査は研究所所属の漁業指導船越路丸にて行い、毎回チンロセンターから2人の研究者が乗船し、佐渡沖からロシアのピョートル大帝湾沖まで日本海をほぼ横断するかたちで刺し網による試験操業、各種観測機器を用いた海洋観測、プランクトンネッ

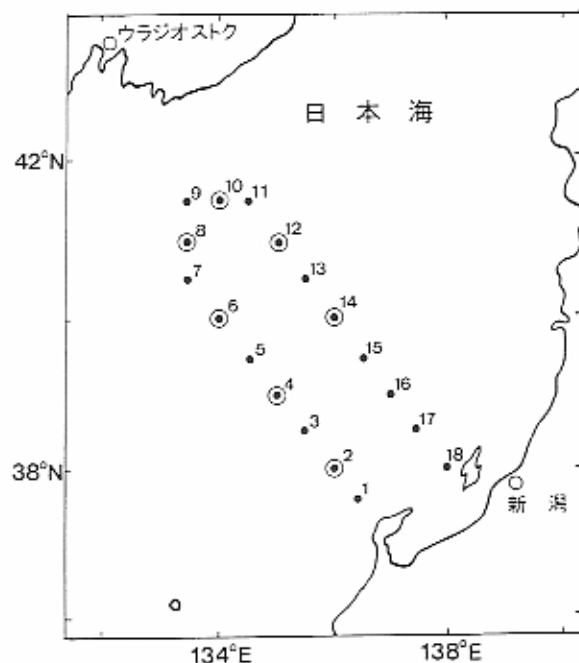


図1 平成9年の調査海域
○は漁獲試験、●は海洋観測定点



浮魚類生態共同調査漁獲試験風景

トによる卵稚仔採集などを実施しています。私は平成9年および10年の調査に担当者として乗船しました。

マイワシからサンマへ

平成9年の調査は9月29日から10月9日の秋季に実施し、11日間で7回操業を行い、魚類ではサンマ、ヒラソウダなど9種291尾を漁獲しました。特に漁獲が多かったのはサンマで161尾でした。平成10年の調査は7月27日から8月3日の夏季に実施し、8日間で6回の操業を行い、魚類ではサンマ、カタクチイワシなど8種2,099尾を漁獲しました。前年に引き続きサンマが最も多く漁獲され1,599尾でした。本調査が開始された平成6年はマイワシの漁獲が最も多かったのですが、平成8年以降はサンマの漁獲が第一位を占めています。

表1 日・ロ共同調査の漁獲物一覧

種名	平成9年	平成10年
マイワシ	10	69
ウルメイワシ	12	7
カタクチイワシ	36	399
マサバ	1	
サンマ	161	1,599
ヒラソウダ	66	18
シイラ	1	
シマガツオ	2	
カイワリ		1
ウマズラハギ	2	1
スルメイカ	39	288
ホタルイカモドキ		2

日本海のサンマ

サンマといえば秋を代表する味覚ですが、その時期は北海道から三陸沖にかけての太平洋側で棒受け網によって漁獲されたサンマが日本中に出回ります。本県には佐渡にサンマ手づかみ漁と呼ばれる伝統漁法があり、6月を中心に漁業者が設置したすのこに産卵のため集まったサンマを手やたも網をもらいて漁獲していましたが、今ではこの伝統漁法はほとんど行われておらず、定置網でわずかに漁獲されているに過ぎません。北海道では太平洋側の棒受け網漁が始まる前に日本海のサン

マを漁獲しているようです。

日本海のサンマについては昭和37年から39年に日本海側の試験研究機関が共同で調査した事例があります。それまで未開発資源であった日本海沖合いに分布するサンマの実状と漁業企業性を判断することを目的とし、流網による試験操業を行いました。これによりサンマの漁場形成や成長・分布・回遊・成熟など生態に関する知見を多数得ました。しかし、日本海沖合い域におけるサンマ流網は経営的に成り立たず、サンマ漁業は根づきませんでした。それ以降、日本海におけるサンマ漁業の衰退にともないサンマに関する研究は先細りとなっています。

8月上旬には沿海州沖合海域で産卵

平成9年の調査では、大和堆の北（北緯40度、東経136度）で、また、平成10年の調査では北大和堆（北緯40度、東経134度）及び沿海州沖合海域（北緯41度、東経133度30分及び北緯41度30分、東経134度30分）でサンマの産卵親魚が漁獲されました。特に平成10年の調査では、刺網を流れ藻と思ったのか多数のサンマ卵が漁具に付着していました。これら産卵場はいずれも日本海亜寒帯前線の北側に位置しました。

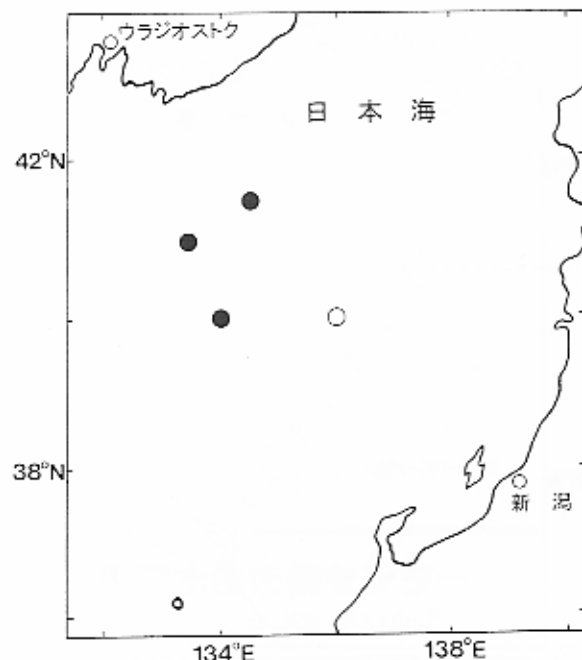


図2 サンマ産卵親魚の出現状況
○は平成9年度、●は平成10年度調査

先に紹介した日本海サンマ共同調査で北上期のサンマは産卵群で4月から7月にかけて産卵期を形成することが明らかにされていましたが、今回の調査でその後8月上旬には沿海州沖合海域で産卵を行い、一部は南下期の10月にも産卵を行うことが判明しました。

日本海のサンマ資源動向に注目

平成に入ってマイワシ資源は急激に減少し、これにともない漁獲量も大幅に低下しています。脂ののった太平洋産サンマに比べると淡泊な日本海サンマではありますが、鮮度保持を工夫すれば刺し身魚として十分通用すると思います。日本海におけるサンマ資源の動向によっては、再び日本海のサンマが脚光を浴びる日が来るかもしれません。

本調査は年一回ではありますが、ロシア200海里内で漁獲試験を行い、浮魚類のサンプルを持ち帰ることのできる貴重な調査といえます。今後も本調査を通じて日本海の浮魚類に関する知見を得ることができればと考えています。



平成9年度日・ロ浮魚類生態共同調査メンバー
前列左から筆者、シェルシェンコフ、田中船長、ゴルシニコフ、池田機関長。2列目以降越路丸乗組員

参考文献

- 1) 金田祐之:日本漁具・漁法図説, 成山堂, 596-597 (1977).
- 2) 日本海サンマ共同調査報告集-昭和37年度-, 日本海区水産研究所 (1963)
- 3) 日本海サンマ共同調査報告集-第2集昭和38・39年度-, 日本海区水産研究所 (1966)

マゴチを増やす試み

— マゴチの種苗生産技術開発研究について —

佐渡水産技術センター 景山啓明

1 はじめに

マゴチは沿岸の砂泥域に生息する魚で、日本海側では新潟県以南の各県に分布しています。春から夏にかけて産卵のため、浅瀬に入ってくるのを狙って刺網や延縄等で漁獲されています。マゴチは非常に美味であり、その単価も高価であるため、この時期の漁業対象種として非常に重要な資源となっています。しかしながら、近年その漁獲量は

減少傾向にあります(図1)。そこで、平成10年度よりマゴチ資源を増大させるため、佐渡水産技術センターでは、種苗生産の研究を始めました。

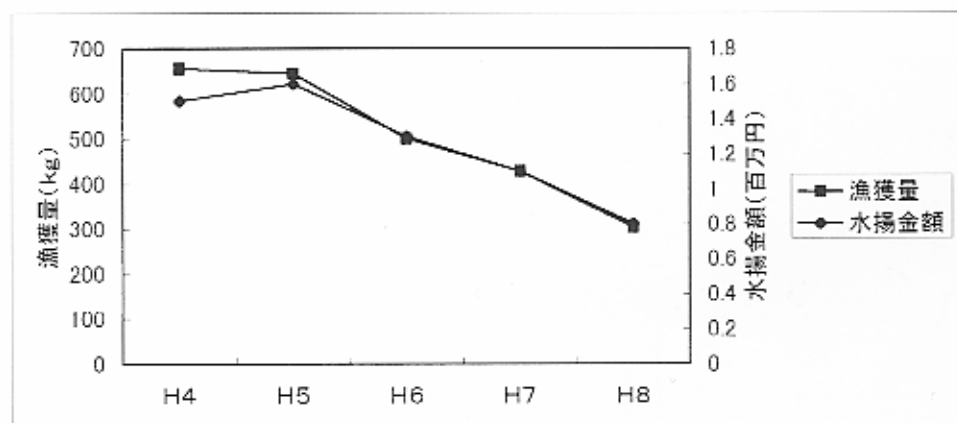


図1 両津市場におけるゴマチ取り扱いの推移